

ヘブル人への手紙2章「こんなにすばらしい救い」

### 1A ないがしろにするときの処罰 1-4

### 2A 人となられたイエス 5-18

1B 身代わりの死 5-9

2B 神の家族 10-13

3B 助ける働き 14-18

## 本文

ヘブル人への手紙2章を開いてください。ここでのテーマは、「こんなにすばらしい救い」です。

### 1A ないがしろにするときの処罰 1-4

ですから、私たちは聞いたことを、ますますしっかり心に留めて、押し流されないようにしなければなりません。

2章は、「ですから」という接続詞から始まります。これはもちろん、1章からの続きです。私たちは前回、御子が御使いよりもすぐれた御名を相続されたことについて学びました。御使いは、大きな権力と主権を持っているけれども、御子はそれよりも、すぐれたお方です。御子は、神のひとり子であり、また永遠の御国の王となっておられます。イエスさまは、父なる神から「神よ」と呼ばれており、天地を創造する創造主でもあられます。御使いは、仕える霊であり、神とまた私たちに仕えています。そこで1章14節をごらんください。「御使いはみな、仕える霊であって、救いの相続者となる人々に仕えるため遣わされたではありませんか。」

救いの相続者となっている人々に仕えている、とあります。イエスを救い主と信じて、神の救いにあずかった人たちです。この救いの相続というのは、永遠の御国を相続されるキリストとともに、自分たちも神の国を相続するという、キリストと共同の相続人である、ということです。これは、ヘブル書1章8節以降に、御子が御国を支配されるところからつながっています。これは、とてつもない救いと栄光です！そして救いとは、3節に「罪の清めを成し遂げる」というところから来ています。

そこでヘブル書の著者は、この救いについて聞いたことを、ますますしっかりと心に留めて、押し流されないようにと警告しています。「押し流される」とは、ちょうど海の浮かんでいるボートが、いつの間にか潮の流れによって、沖へ行ってしまい、だれかが救命しなければいけないような状態です。御子について、また、救いの相続について、いつの間にか自分が離れていってしまい、もう取り返しのつかない状況にならないようにしなさい、ということでもあります。

ヘブル人への手紙は、ヘブル人、すなわちユダヤ人に対して書かれた手紙であることを思い出してくだ

さい。ユダヤ人の中で、多くの人たちがイエスさまを約束のメシヤとして信じました。けれども、彼らは律法にも熱心な人々であり、神殿礼拝も守り行なっていました。ユダヤ教の中でイエスを信じていたのです。ところが、ユダヤ人たちは、彼らがイエスを信じているということで、彼らを迫害しました。そこで、この迫害から免れるために、彼らは自分たちが信じているイエスさまから目を離して、ユダヤ教の中に舞い戻ろうとしていました。ヘブル書の著者は、ユダヤ教の中に押し流されて、イエスの御名によって与えられている救いの相続を失ってはいけない、と警告しています。

ですから私たちには、「ますますしっかり心に留めて」という言葉があります。イエス様を矮小化してしまう危険があります。今こそ、キリストがキリストとしてあがめられるとき、御子の地位について学ぶ時であります。

もし、御使いたちを通して語られたみことばでさえ、堅く立てられて動くことがなく、すべての違反と不従順が当然の処罰を受けたとすれば、私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにしたばあい、どうしてのがれることができますよう。

「御使いたちを通して語られたみことば」というのは、神の律法のことです。前回もお話しましたが、モーセの律法は、神から御使いに伝えられ、御使いからモーセに伝えられました(使徒 7:53)。ですから、御使いを通して与えられた律法が、堅く立てられて動くことがなく、すべての違反と不従順が当然の処罰を受けた、ということになります。そうですね、モーセの律法を読むと、それは決して変更されることなく、また律法に違反したら、その人は死刑などの処罰を受けました。例えば、ヨシュア記のカインは、聖絶のものを取ったので、石打ちの刑になりました。

そこで、ヘブル書の著者は、ましてや、救いの相続について、主イエスご自身のことばをないがしろにするなら、あなたがたは、神からの処罰をまぬかれることはできませんよ、と警告しているのです。ヘブル書10章28、29節にはこう書いています。「だれでもモーセの律法を無視する者は、二、三の証人のことばに基づいて、あわれみを受けることなく死刑に処せられます。まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい。」

「ないがしろにする」という言葉を、他のところで使っている箇所がいくつかありますが、その一つはマタイ22章3節です。王子のための披露宴を王が設けたのに、招待しておいた客にしもべを遣わしても、来たりませんでした。「ところが、彼らは気にもかけず、ある者は畑に、別のものは商売に出ていき…」とあります。私たちがこのように畑のような日常の仕事、そして商売のような自分を駆り立てるものによって、キリストの招きに気にもとめなくなったとき、「なおがしろ」という過ちを犯します。

この救いは最初主によって語られ、それを聞いた人たちが、確かなものとしてこれを私たちに示し、そのうえ神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざにより、また、みこころに従って聖霊が分け与えてくだ

さる賜物によってあかしされました。

この救いのことばが、どのようにして伝えられていったのかを、ここで話しています。最初主ご自身によって語られ、それを聞いた12使徒たちによって、確かなものとして示されました。また、しるしと不思議をともなった宣教を使徒たちは行なっていましたが、そのような力あるわざによって、主のみことばがあかしされました。そして、みこころに従って聖霊が分け与えてくださる賜物とありますが、これはコリント人への手紙第一12章に、同じように言い回しが出てきます。御霊の賜物について、知恵のことば、知識のことば、預言、奇蹟を行なう者、いやしの賜物、異言、異言を解き明かすのは、みな御霊がみこころのままに、それぞれに与えられます。この賜物によっても、彼らは、主のみことばが確かなものであることを知っていました。

## **2A 人となられたイエス 5-18**

そして5節から、神の御子としてのキリストから、人の子として、人としてのキリストへと話題を移します。万物を支配し、万物を相続しておられるこの御子が、私たち人間と等しくなり、その苦しみを追ってください、そして弱さを知り、そして負い目を負ってくださったということです。

### **1B 身代わりの死 5-9**

神は、私たちがいま話している後の世を、御使いたちに従わせることはなさらなかったのです。

御子が永遠の御国の王となられますが、そのときに救いにあずかった人たちは、キリストとともに御国の王となることが聖書には書かれています。黙示録には、「(キリストは)、私たちを王とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。」(1:6参照)とあります。これは、イエスさまが再び地上に戻って来られて立てられる、千年王国によって実現するものです。ですから、今話しているのは「後の世」のことであり、これは人間が相続するものであり、御使いが相続するものではありません。

ここに何度も何度も、「人間の尊厳」が強調されています。神が関心の的にあるのは、人間なのです。他のいろいろな事柄があるでしょう、しかし神の関心事は、いかにご自分の御子の支配する国に、人を招き入れるかということにあります。

そこで、次に、詩篇8篇を引用して、人間がいかに神のみこころに留められた存在であるかを論じています。むしろ、ある個所で、ある人がこうあかししています。「人間が何者だというので、これをみこころに留められるのでしょうか。人の子が何者だというので、これを顧みられるのでしょうか。あなたは、彼を、御使いよりも、しばらくの間、低いものとし、彼に栄光と誉れの冠を与え、万物をその足の下に従わせられました。」

この詩篇の個所の手前には、「あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。(8:3)」と書いてあります。私たちは夜に、月や星を見ます。それがい

かにすばらしく、大きな存在であるかを思います。けれども、自分はこんなにちっぽけな存在である。なぜ、神はこのような者にみこころを留めておられるのか、と言っているのです。創世記1章を思い出してください。そこには、最初の人アダムが神によって造られ、そしてこう命じられています。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。(1:28)」神が人を造られたとき、人が行なうことは、この地を支配して、生き物を従わせることでした。これが、神が人に与えておられるご計画であり、もともと人間は、神に支配されながら、地を支配する存在だったのです。

万物を彼に従わせたとき、神は、彼に従わないものを何一つ残されなかったのです。それなのに、今でもなお、私たちはすべてのものが人間に従わせられているのを見てはいません。

アダムが罪を犯して、この世界が悪魔のものとなって以来、この世界は人ではなく、悪魔によって支配されました。悪魔は「世の君」とも呼ばれ、神に不従順な者たちのうちに働いている霊となっています(エペソ2:1-2)。ですから、私たちは、すべてのものが人間に従わせられているのを見ていません。そこで、イエスさまは、このような状態から人間を救われるために、あることをなさいました。

ただ、御使いよりも、しばらくの間、低くされた方であるイエスのことは見えています。

イエスさまは、この世界を贖い、また私たちを贖い出して神のものとするために、人となりました。「御使いよりも、しばらくの間、低くされた方」というのは、イエスさまが、人となられたことを意味します。ピリピ書2章で、パウロがこう言っているとおりです。「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができずとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。(2:6-8)」

イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。

ピリピ人への手紙2章には、今引用したところの続きにこう書いてあります。「それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である。』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。(2:9-11)」ですから、イエスさまは、十字架の死の苦しみを味わったので、栄光と誉れと冠をお受けになりました。

ヘブル書で強調されているのは、死に向かうときの肉体の痛みです。ユダヤ人信者が受けていた迫害の痛みがありました。そして、人類全体が受けている痛みがあります。その苦しみの行きつくところは死です。アダムが罪を犯して、それで痛みと死が世界に及びました。この痛みと死から人を救うために、御子であられる方がイエスという人となられて、..そうです、「イエス」は「ヤハウェは救い」という意

味です・・、苦しみと死を身にまとわれました。

この死は「神の恵み」とありますが、イエスさまが、私たちの罪のために、代わりに死んでくださったところに、神の恵みがあります。神が私たちを嫌がっているけれどもキリストを死に渡されたのではなく、それでも一方的に好意を持っておられて、キリストを死に渡されました。

## 2B 神の家族 10-13

神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであったのです。

なぜイエスさまが、人となられたのでしょうか？そして、あの十字架刑になぜ処せられたのでしょうか？それは、ここに書いてあるように、「多くの子たちを栄光に導く」ためなのです。神の御国を受け継ぐという栄光に、万物を支配するという栄光にあずからせるためです。イエスさまが、多くの苦しみを通られることによって、罪と死の中にいる私たちを解放し、再び神の子ども、神の相続人としての地位を得ることができるようになりました。

ここに「救いの創始者」と書いてありますが、救いの先駆者と言っても良いでしょう。苦しみと死の中にいる人間を救うのに、イエスがその苦しみと死の中かに入られました。苦しみを全うする、つまり十字架の死に至るまでその苦しみを全うすることによって、初めて救いを創出する人になることができました。

それが、「万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしい」とあります。私たちは決して、聖書の神を、宇宙の遠くにいて、この汚れた、不完全な世の中に関与されていない、勝手に物事を動かしている存在として考えてはいけません。私たちはすぐに原因探しをします。神のみしか分からない理由を探そうとします。いや、神ご自身がそれを行なわれません。神が行われるのは、被造物の苦しみと悲しみと一つになられることです。共におられることです。万物の目的であり、原因である方が、イエスにあってその万物の苦しみを負われることは、ふさわしいことでした。

聖とする方も、聖とされる者たちも、すべて元は一つです。

「聖とする方」とはイエスさまのことです。「聖とされる者」とは私たちのことです。すべては元は一つというのは、イエスさまは人となられて、アダムと同じような人間になられた、ということです。私たちはアダムの子孫ですが、イエスさまも同じようになられました。だからアダムにおいて「一つ」です。

ですから、イエス様は救いの創始者になられただけでなく、聖める方にもなりました。「聖める」とは、「別つ」という意味があります。罪と汚れの中にいる者たちから、ご自分のものとして別つ、という意味になります。私たちがキリストにあって聖なる者、罪から離れた者とされました。

それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」またさらに、「わたしは彼に信頼する。」またさらに、「見よ、わたしと、神がわたしに賜った子たちは。」と言われます。

主は、よみがえられてマグダラのマリヤのところに行かれたとき、こう言われました。「わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。(ヨハネ 20:17)」主は、弟子たちのことを「わたしの兄弟」と呼ばれるのを恥とされませんでした。主は復活されてから、このように兄弟となっていただきました。主は、ご自分の復活によって、兄弟たちに親しく接することができ、弟子たちも御霊の力によってキリストの戒めを守ることができるようになりました。「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。ローマ 8:29」

これはそれぞれ、詩篇 22 篇 22 節、イザヤ 8 章 17 節、また 18 節からの引用です。主は、御霊によって、教会の中で兄弟たちを導いておられます。父なる神の御名を告げ知らせ、父なる神をほめたたえるように導かれます。また、神に信頼するように導かれます。そして、イエスさまは、ご自分と同じように、神の子どもとして導かれます。

### 3B 助ける働き 14-18

そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。

この個所においても、イエスさまが人間となられたことが書かれています。今までのところをまとめますと、イエスさまが人となられたのは、私たちが神の当初のご目的である、地を支配する地位にまで回復されるためであり、また、イエスさまが人となられて十字架につけられたのは、聖なる者とされて神の家族の中にはいるためです。そして、この個所では、私たちが死の恐怖から解放するためである、とあります。

私たちは自分の足台に、すべてのものが従っているのを見ていません。ことに、「死」というのは、私たちに決して支配できない、どうしようもないことです。どんなに権力があり財力があっても、だれもが死ぬのであり、これは避けられない事実です。けれども、これは、神が初めに人を造られたときにお考えになっていたことではありませんでした。イエスさまが、ラザロの家におられたとき、泣いているマリヤの姿を見て、またいっしょに泣いているユダヤ人たちの姿を見られて、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じられました。そして、イエスさまは涙を流されました(ヨハネ 11:33-35)。死というものが、人にいかに悲しみと絶望をもたらすものであるかを、主は憤っておられたのです。私たちは死を恐れます。死んだらどうなるのか、と恐れます。その死によって、私たちが生きていることが、不条理にさえ思えます。そこで、コリント人への手紙には、死は「最後の敵」と書かれています(1コリント 15:26)。

そして、死というのは恐怖です。死んで、死後に裁きがあることが定まっています(ヘブル 9:27)。その裁きを知っているのだから死は恐ろしいのです。けれども、愛は恐れを締め出します。「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。(1ヨハネ 4:18)」

しかし、ご自分が死なれることによって、死の恐怖をもたらしていた悪魔のしわざが打ち叩かれました。コロサイ書には、「神は、キリスト(十字架)において、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。(2:15)」とあります。そして、イエスさまはよみがえられました。キリストを信じる者もよみがえる希望が与えられました。したがって、私たちにとって死は天の中に入る希望であり、死の恐怖に打ち勝っているのです。

主は御使いたちを助けるのではなく、確かに、アブラハムの子孫を助けてくださるのです。

私たちは1章からずっと、御使いのことが出てきていました。1章では、御使いと御子が比べられていましたが、2章では、御使いと私たちが比べられています。私たちが神からみこころにかけられているのは、御使いが神から気にかけているよりも、はるかに大きいことを2章では述べられています。御使いではなく人が、そして御使いではなく、アブラハムとの契約の中に入っている子孫が、神から助けを受けていました。御使いではなく「人」が強調されています。

イエス様は、18年間背を伸ばすことのできない女を癒されて、「この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。(ルカ 13:16)」と言われました。人は、人の人間性をないがしろにします。その尊厳をいつのまにか無関心という罪によって押しつぶします。しかし、神は御使いよりも人のところまで来て、助けてくださるのです。

そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。

イエスさまが、私たちと同じになられたことについて、あわれみ深い忠実な大祭司となるためである、と言っていますが、大祭司の務めについては、3章にて書かれています。けれども、ここでは、「民の罪のために、なだめがなされる」とありますが、大祭司は、年に一度、至聖所の中に入って、契約の箱の贖いの蓋の上に、血をふりかけて、イスラエルの民の罪のなだめを行ないました。神が人の罪にたいしてお怒りになられているのですが、それをその怒りが満足されるよう、そこでいけにえの血がふりそそがれたのです。イエスさまは、ご自分がそのなだめの供え物となりました。

主は万物の支配者でありながら、人を憐れむことができになります。私たちが御子を見る時に、どんな状況をも支配しておられる全能の方であることを仰ぐことができると同時に、どんな小さなこと、弱さで

あっても助けることができる方です。そして、忠実な方です。途中まで付き合っ、あとで放棄するような方ではありません。

主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができになるのです。

イエスさまは、罪は犯されませんでした、誘惑はお受けになりました。人と同じように、肉体にある弱さを持っておられました。罪を持たず、なおかつ誘惑を受けることは理解できないのですが、けれども、実際にイエスさまのからだのうちでは、そうになっていたのです。ですから、私たちが受けている誘惑、また試練は、イエスさまに知られていないものは何一つありません。私たちが日々の生活の中で、「このことは、だれにもわかってもらえない。」という苦しみがあるでしょう。けれども、主はそのすべてを知っておられます。なぜなら、人となられたときに、その試みをすべて経験されたからです。ですから、すべてのことを知っておられるイエスさまに、力をいただくため、大胆に神の御座に行きましょう。

ですから御子はイエスにあつて人となられて、救いの創始者となられました。そして、人を聖める方であり、死に征服された方です。それだけでなく、憐れみ、試みの時に助けてくださる方です。なんとすばらしいことでしょうか！この方によって生きる時、御霊が私たちのうちに働かれる時、私たちのうちにもキリストの姿が形造られていきます。主をほめたたえましょう。